日本書紀傳

廿六ノ巻四

和書
一〇五二二號

内閣文庫
番號 和 10522
冊數 156 (95)
函號 特 85 1

内一二六八三號

国立公文書館
National Archives of Japan

文部省消印
文庫印

傳へたるうら後ふ三女神の官と實ふ成ゐる者あるも可ふ故此七社の中ふて八王子三宮客人宮の三所共ふ槽の此比叡山の賀茂神ふ〳〵て千向神ふ御在〳〵生ふ始めて後ふ種この神とハ成ゐるふてゞ有ゆる

○葛野ハ記傳十二四十三丁ふ加豆怒と訓べ〳〵中巻明宮段天御歌ふ知婆能加豆怒袁美禮婆と見ゆ書紀垂仁天皇御巻ふ唯竹野媛者因形姿醜返於本土則羞其見返到葛野自墮輿而死之故号其地謂墮國今謂弟國訛也と有を思へゞ古ハ乙訓郡遍遠係て泣く葛野と云しるゆ和名抄ふ山城國郡葛野加止乃又葛野郷ゆ見ゆ加豆ふ葛野を用ひたるハ久豆を加豆と云〳〵ふり字音を取ゆるよハ非ず後ふ加抒野と云ハ加豆の

（宝葉建久三年十二月廿日條ニ松尾行幸神寶御覽寶殿三所ニ各金銀幣一具並御鏡是男体之故也又女体之御劔等平緒ニ有ル北男体ハ大山咋神女体ハ市杵島姫命御母子ナレ二座ニ渡ス〳〵ヤ給ヒ賀ヘリ）

轉ガなめ下總の葛飼ハ音を取リ例異ル補と意
見ゆ此葛野ニ就て予別ニ説有リ傳十四三十四丁ニ云ヘリ
き○松尾ハ記傳十二四十四丁ニ山城國葛野郡松尾神祠二座
並名神大月次相嘗新嘗是ヲリ此御社ハ古より佛法の混ぬ
故ニ今ニ至迄大山咋神と詳ニ申せり と云ハき此
大神の御事ハ上百五十二丁ニ其御名を説奉ル所ニ委
〳〵く注せるが如く賀茂ハ別雷神と申一日吉ニ
てハ山末之大主神と申奉リて正身ハ事代主神ニ渡
〳〵セ給ふ御事ヲリ今一座ハ注式ニ胸形中都大神市杵
島姫也素戔嗚御子と有る是ヲリ東寺藏古文書の中ニ元久元

年三月五日左辨官下山城國松尾社中略當社者鴨御祖
社ニ御同体朝家尊四之靈社也中略大史ニ擬宿禰と有
を鴨氏人記ニ御祖神社を姫大神と書一神佛眞應編
ニ下賀茂官宗像姫神也と有ニ合リ然るハ姫大神と
申奉るハ八幡ニて三女神を申す御名宗像姫神と申
すニ同じき所由已ニ傳十五三百五十九丁十八六十四丁ニ注る
が如一本朝月令ニ松尾社奉氏本系帳云正一位勲一
等松尾大神御社者筑紫胸形坐中都大神戊辰年三月
三日天下生松埼日尾又云日埼岑大寶元年川邊腹男奉忌
す都理自日埼岑更奉請松尾又田口腹女奉忌す知麻

留女始立御阿禮知麻留女之子秦忌寸都駕布自戊午
年爲祝子孫相兼祈祭大神自其以降至元慶三年二百
三十四年と有り此ふて宗像大神の大山咋神と御世
子共ふ此ふ御在し坐す御事明らかなり或書ふ引る
筑前宗像社家の藏る古文書ふ山城國松尾社當時既
神事等及退轉候由被歎思食者也然者筑前國宗像社
者爲當社一体之事候間彼社家中別而勵興隆之志相
勸國中奉加等令運送於本社者可爲神妙候由可令下
知給者天氣如此仍執達如件天正五年十月廿四日謹
上伯中將殿左中辨花押と有ハ後の物ふなれど證と爲べ

き者なり但筑前國ふて い今其傳をもひて宗像中津
宮の方ふハ更ふ其所由も知らざりける
ふ隨津宮ふハ其鳥居の外ふ松尾社とて攝社の立せ
御在し坐ハ右の天正の度よりの事ふや今詳ならず
或人右の本系帳の年紀を考てるに自其以降と有ハ
秦忌寸都駕布自戊午年爲祝と有る時より以降と云
る文ふて其戊午ハ大寶元年より後十八年養老二年
なる可きを然てハ百十二年なれバ年數合ず又本の
任ふ二百三十四年を推上せて等ふれバ大化二年丙
午ふ當りて大寶元年と有より五十年以前なれバ此
し叶いす故熟考るふ三代實録ふ元慶五年三月廿六
日甲戌制令五畿七道諸國神社禰部氏人本系帳三年
一進ニ見えたり度ふ此本系帳を進ル者る可し
然れハ元慶三年と有る三ハ五の誤寫ふて五年と爲
べし偖養老二年戊午より元慶五年迄の年數百六十
四年なるを本ふ二百三十四年と有ハ合ハず故考る
ふ其二百の二字ハ衍なり其衍ふる由ハ此原本ふ至
于元慶三年百云ニ年と書たり助假名を誤りて本
文の百字の上へ混へ寫たる者なり又三十四年の三ノ
字ハ六の誤なり如此訂して至于元慶五年百六十四

年と爲る時に總て事實脩ひて聞ゆ又上文に戊辰年
と云るは其大賚の以前に天智天皇の七年に在り
此年頃を云るる可し」と云り 偖松尾神社は東向にして南北に二
社並給へり其北東間は大山咋神にして南間は胸形中
都大神に坐と云り注式廣田社五座の中の第四を南
宮と書して細書に松尾大山咋神南宮嚴島明神宗像
明神と有れば松尾本社に對へて南宮と申せるなりけり
但此文(今)本に八祖神の下に在い誤なり今訂して引
り若て右の本系帳に云所は(此)南宮の御事にして其
大山咋神に神代に已に此國を作給しより以
降其日埼岑に御在し坐けるなりけり或書に別雷峯

云松尾本殿戊亥十町許山上此所有巖此即當社神降
臨所也相傳神詠云山城乃別雷山尓宮居士亭天降古
登神代與利佐幾と所見なし(上)神代より以降此岑に
其般屋を御座として御在し坐けるなり今地理を考
るに正に嵐山此に當る可し其筑紫胸形中都大神戊
辰年三月三日天下坐松埼日尾(又云日埼岑)と有る戊辰は
或人天智天皇七年に當る可しと云るは然る說にて
上百六十に書せるが如く日吉神社の御鎮座は其元
年なれば必其前後に在べき事なり天下坐松埼日尾
と云地は其嵐山の麓にて松尾七社の中なる櫟谷宗

像両社御在し坐る其始を云ふる可し其櫟谷社ハ
大山咋神を祀くるて其神体ハ上百五十ハ云ふる丹波
國鍬山神社より移せりと云ハ此時の事とそう所思
ゆれ拾芥略要抄ハ有行幸幸勅使起と云件ハ宗像本
社筑前國と有ハ當社の御事ふるを思ふる此時筑紫
より勸請ゆて右の櫟谷社と相並び坐る此事を右ハ
天下坐と書せるゆり大寶元年ハ自日埼岑更奉請
松尾と云ハ右の嵐山麓ふる櫟谷宗像両社より今の
松尾ハ移奉ふるを云ふるり若ても其地ハ猶御靈を留
櫟谷神社坐り宗像神社ハ式外ゆて神名式ハ葛野郡
て渡川橋の西嵐山の麓ハ立せ給へり此二社の御事

（但大中臣定好松尾鎮座記云元明帝和銅二年四月十一日山城國山田莊荒子山ハ賀茂神奉傳云云と云ふるハ秦氏ハ賀茂ハ往居たるハ此より始めて移任ふるなる可き事下より引ふる文ハ爲孚護留與と有ふる加心）

下百十下ハ云べし御社ハ東向ふて北方ハ櫟谷
南方ハ宗像両社相並び給へる狀も松尾神社ハ異ふ
ふざる偖其大寶元年御鎮座の御事ハ色葉字類抄の
松尾社條ハ本朝文集云大寶元年秦都理始建立神殿
立阿禮居齋子供奉天平二年預大社と云ひ諸神記注
式共ハ文武天皇大寶元年秦都理奉勸請松尾始造立
神殿聖武天皇二年預大社と有て何ハも合ふり然し
バ天智天皇七年戊辰より此年迄凡三十四年右の日
埼ハ御在し坐て此ハ鎮坐る大寶二年より三十年の
後天平二年初て大社の列ハ預ゆせ給へるあり偖
右の本系帳ハ自戊午年爲祝子孫相兼祈祭大神と有

但鎮座記ハ和銅二年四月十日秦氏同正元荒子山松尾為鎮護留典と有り

る戊午ハ養老二年ハ當ればそれ其頃より官ハも已ハ祀ラセ給ふ御事ある故ハ始て祝部を此ハ置せ給へる者あり其立御阿禮と云事ハ本より賀茂社ハて執行ふ祭事ありを此ハてハ仕奉る事とハ成ぬるもの然るハ賀茂祭の事ハ秦氏本系帳ハ鴨下上松尾の奉祭三所大明神而鴨氏人為秦氏之聟也秦氏為愛聟以鴨祭讃與之と有ハ其ハ秦氏ハも世ニふ掌めし事ありハ此ふとハ必行ふ可き者なり（事ありハ此ハ曲緒ハ下ニ云へ）其御阿礼の事ハ色葉字類抄ハ本朝文集云御祖多ニ須玉依媛命始遊川上時有美箭流来依身即取之挿床下夜化美男相副既知任身遂生男子不知其父於是為知其父乃造宇氣比酒令子持坏酒供父此子持酒盃振上於天雲而云吾天神御子乃上天也于時御祖神等戀慕哀思夜夢天神御子云各將逢吾造天羽衣天羽蓋炬火祭鉾待之又餝走馬取與山賢木立河礼悉種々絲色又造葵楓蘰歳餝待之云吾將来御祖神即隨夢教令彼神祭用走馬并葵蘰楓蘰此之縁と有る此故事を云るなり（遣）記傳十二四十四丁ハ（ここ續紀ハ）延暦三年十一月戊辰朔丁巳遣兵部大輔従五位上大中臣朝臣諸魚叙松尾乙訓二神従五位下以遷都也と有り此遷都ハ長岡宮ハ遷坐を云ふ乙丑遣使修理賀茂下上二社及松尾乙訓社と有ル其御事ハ因てなり同五年十二月辛巳叙従五位下松尾神従四位下と見ゆ此事日本紀略ハ同十三年十月鴨松尾神加階以遷都也と有り此遷都ハ今の平安宮ハ移坐を申せり續後紀ハ嘉和十二

年五月　朔庚午奉授従四位上勲二等松尾神正四位下餘如故同十四年七月甲子朔己丑奉授正四位下勲二等松尾大神従三位餘如故と有ハ此以前ハ同年六月甲午朔丙申大風發屋折木雨亦降入夜弥猛丁酉遣使奉幣於松尾大神祈之甲寅霖雨止息先是左相撲司伐葛野郡家前槻樹作大鼓有祟由是奉幣及鼓於松尾大神以祈謝用皷牛皮十二張一面六張と有り此御事ハ由ハる ある可し嘉祥二年二月丙戌朔壬辰勅従三位松尾大神社祝宜祝等預把笏之例と有て此頃の事ハ松尾大神と書ハたるい此程より公家の御崇敬愈勝〳〵て給へ

域

今て此大神神代より松嶋昌尾ハ故有て御靈ハ留めたてゝ御在ハ坐ける小冬武天皇御代ハ宮柱定仕奉ると也ハ小後ハ平安ニ同し城内ハ出来ゆて其近宇神ニ崇れさせ御在ハ坐す御事實ハ幽契有て云ハ〳〵も妙なる御事なるハ皇御孫公卿の御尾前そして賀茂松尾日吉ハ三所ハ守奉ると御在ハ坐す御事ハて天壌と並窮き宮祢の御上ハかて甚なれ頼もしき御事なるめける古記ハ或古記ハ平安宮出来日主不明之都也東有叡神西印猛靈叡神者賀茂大神宮猛靈者松尾靈社是也依二神之頭護朝萬代之平安を有ハ貴ハ貴ハ其謂有る御事ハなむ若て

るゝ文德天皇實録ハ仁壽二年五月丁卯朔甲戌加山城國松尾神正二位清和天皇實録ハ貞觀元年正月廿七日甲申奉授山城國正二位勲二等松尾神從一位同八年十一月廿日進山城國從一位勲二等松尾神階加正一位と見ゆ後拾遺集ハ一條院御時始て松尾の行幸侍けるハ謡ハ可き歌仕ハ奉けるハ源兼澄千早右破松尾山の陰見れば今日ハ千年の始なりける補意と有り然ハ秦忌寸ハ養老元正天皇二年戊午ハ祝と爲て仕奉ハるを仁明天皇嘉祥二年ハ至りて把笏の例ハ預奉ハるなり偖此秦氏ハ本系帳の一説ハ又云初秦氏女

子出葛野河瀚濯衣農時有一矢自上流下女子取之云
云と云て彼玉依日賣の故事を其氏の女子の事と爲
り姓氏録山城國諸蕃小秦忌寸太秦公宿祢同祖秦始皇帝
之後也と有て此い應神天皇御世ふ歸化の蕃種なる
を知るべく遠き神代の故事を其氏人の女子の事ふ
云成せるい松尾社家の秦忌すい其せい別種なるよ
て同録山城國別天神神ふ秦忌す神饒速日命之後也と有る
是なるまや然ばども其玉依日賣命ハ賀茂建角身命
の女ゝて母ハ丹波神野神伊可古夜日女命ふ坐せ
ば其神ハ饒速日命の御女なるべゝ其由緒ふ依て

其伊可古夜日女命ふ由有る秦忌すと建角身命の裔
なる賀茂縣主と二氏其國ふ在しるの然ばば上ふ引
き鴨氏人の祖鴨氏ハ爲秦氏之種也と云ふ神代の事ふ建角
身命を秦忌すの祖と坐す饒速日命の智ふ取くせ給
ふるを近世の狀ふ曰成せるなりけり此事猶下百九十六
ふ云べし夫木集世四卷ふ久安百首神祇安藝子石
神と有る此藤白神更ふ考る便宜無し紀伊國在田郡
鈴木家系を見るふ櫛玉饒速命藤白王子權現熊野一
之鳥居と云事有り此りて藤白王子權現ハ秦忌す
ふる祖神ふて渡くせ給ふ饒速日命ふ坐を以て右歌
ハ其事を詠るふて渡くせ有べゝや如何ふも由有げるゝ
如何事共るり又神名式ふ山城國葛野郡木島坐天照
御魂神社名神大月次新嘗此も其神ふ御在し坐す由
已ふ傳世一卷十ふ云るが如し然れば松尾の

秦忌すハ正一き神別よ右小引る仁明天皇御紀の御
て蕃種ふハ非ゆゆり
祟の御車悉（委）〻ハ本朝月令小國史云秦和十四年六
月霖雨止息先是左相撲司伐葛野郡ニ家前槻樹作大
鼓有祟由是奉幣及鼓於松尾大神以祈謝用鼓牛皮十二
張一面 口傳云松尾社祢宜奏眞足祝秦興主依犯用大
六張
鼓輪鐵解却見任興主罰一人大膳職掌一人沙弥住神
宮寺也眞足無子初深草天皇之御時伐葛野郡家前槻
木作相撲司之大鼓明神忿怒託宣云此樹者我時ニ来
遊之本也而伐取不可然云云其伐本國人多死去也行
事官人墜馬傷身也時人云嘉祥元年洪水爲流彼村所

出来也神明之祟猶不止奉爲公家數ニ有現遂奉彼鼓
進神社其鼓經年破損眞足興主竊取彼鐵輪作雜釘馬
鞍等売賣買料（料千）子時神明示祟公家仍勘發解却祢宜祝
之職入右大臣源多卿爲奉幣參神社見此鼓管無皮意
得將張此鼓可善後日大臣病患之時令占祟由陰陽寮
吉曰有神明之祟心中反覆是尤鼓事也將張無輪因以
針張之張鼓之後音樂之奏百倍他 時云云と有り神
威の可畏く御在一坐す御車を見奉る可一或說小公
卿補任を考るふ從二位右大臣源多公ハ仁明天皇即深草
草天皇の御子ゆて仁和四年十月十八日五十八の齡小

て覺給へり偖此文を考るに彼敷い兼和十四年に此
御社に奉り其敷經年破損と有を其本系帳を奉ら
元慶五年の頃と見る時は多公五十歳の時なり右に
謂ゆる秦に眞足秦興主い其時の人にして其帳を匿し
る世に在一人なりと云り元亨釋書に建久七年七月
雷折松尾祠後大杉其木覆
神殿欲伐之其材大難制恐厭神殿若不伐異時に風雨
人自壓倒神官與僧延朗議朗曰莫慮早伐又杉中有奇
事耳已而加斧其杉如相避仆殿側於是手杉中忽逆出
一滌塔其中又有銅塔盛舍利神官見之益信朗言便於
祠之南建三層塔安之云事を書せり妖僧の愚人を
誑す許り世に恐るべき者い非ゆゆ其大杉の雷
に折るに程なれば手經たゆ木にて中い空に成け
もを見附て其塔を排置るなり莫慮早伐又杉中有奇
事と云るい其塔を早く示せて信を愚巫愚祝に取り
其神地を犯して胡神を祭るもと爲る奸謀なり阿と

奸なる哉愚なる哉社說に所傳松尾七座名松尾社月讀社櫟谷
社三宮宗像社衣手社四大神と云り其一い松尾本社
なり其二い月讀社なり此御事い已に傳十百十十
四十に注に奉ゆりき其三い櫟谷にて此い神名式に
葛野郡櫟谷神社と有る是なり此地い右百八十に引
る本系帳に松尾埼日尾にして其始大山咋大神の胸
形中都大神と共に始て鎮坐ける本宮なるを大寶元
年に今の松尾に移奉るゆなる後も猶其迹を遺して
櫟谷宗像兩社共に其遥宮として祀るなる可し
偖此に一の考有り上百五十六丁に云り如く松尾の本社を

（接磨以上記ハ佐谷郡鍬柄川神ハ是命之秘金柄金採此山故其山之川号曰鍬柄川と有る此神日子命ハ即味耜高彦根神ハ御事ハ柴大山咋神ハ御在ハ坐ハ此ハ鍬柄と云事を又由有て思ゆるる）

有る丹波國鍬山神社ハ其國作の御鍬を以て神体と成し奉り鍬山大神と齋奉りを其御鍬を移し奉りる即松尾大神ハ御在し坐るハ就て考るハ樂谷神社ハ其鍬柄を祀りるハ非るや然るハ太神宮式ハ凡樂營神田鉏鍬柄者毎年二月先祭山口及木下然後採以と有る此事を皇太神宮儀式帳ハ始祢宜内人等寧山向物忌子湯鍬山ハ参登時波云云山口神祭然到樂木本即木本祭然其木本ハ山向物忌に令以忌鉏を切始を然即祢宜内人等加戸人夫等に令切を湯鍬に造持を云云と有る此樂ハ擅木の種類ハして堅き物るを以て鍬柄ハ作ると所見なり建久行事記其鍬山伊賀利神事條ハ各以堅木鍬作と有り此を以て考るハ始其鍬を納奉りる所を鍬山と云る（ろい菜田と准）いハ今又其柄を齋きて樂谷と云ふ有り（續後紀ハ嘉祥）清和天皇實録ハ貞觀十年閏十二月十日己亥授山城國従五位下樂谷神正五位不同十二年十月十七日近於葛野鑄錢所宗像樂谷清水堰ハ社五年奉鑄錢所新鑄錢と有て此時ハ告文有り百練抄ハ仁治二年八月七日今夜丑剋樂谷宗像兩社燒亡御体同燒亡り是松尾末社也と云事ハ所見なり宗像社の御体の事ハ知ら

（元亨二年十一月丁巳朔戊午奉授山城國無位樂谷神従五位下）

此御巫傳三十卷三十五丁ヨリ妻ヘ注ス可シ

此給はざれども此社の御体若神代の舊物なるべし
ハ甚と可惜しき御事なるべし爲家卿貞應三年の百首ふ大井川時雨
る秋の櫟谷山や嵐の色を借すべしと嵐字を立入て
詠るハ此地嵐山の麓の尾崎ふ在れば也ありて即古の松
崎日尾三宮ハ其第四なり松尾の南ふ在とぞ右百七十八
是なり
ヿふ云る如く日吉神社の三宮の例なるべ此御社も
亦三女神ふ渡せ給ふ可し其ハ本殿ふハ胞形中都
大神と申して市杵島姫命を立て祀る故ふ此ハ其三
女神を合せて別ふ齋奉ふるる可し其第五ハ上ふ
も云る宗像社ふて櫟谷社と並び立せる是なり秦氏
本系帳ふ筑紫胸形坐中都大神氏辰年天下坐松埼日

給はず略要抄有行幸并勅使起と有る條ハ宗像本社筑前國と有ハ此ふ引合べき事なるよ

尾又云日埼岑大實元年川邊腹男泰忌す都理自日埼岑更
奉請松尾と有て筑紫より初て勸請なり宮處なる
を松尾ふ移し祀りたる後も其迹を遺して祭る
事上の櫟谷社と同ト例なりと聞えたり右ふ引る
清和天皇實録ふ貞觀十二年十月十七日鑄錢所新錢
を被奉るも宗像櫟谷両社相並び給ひ又百絲抄ふ
見えたる仁治二年八月七日より櫟谷宗像両社焼亡
と有も同所ふ相並び給へるを以なり又寛元二年
云云松尾社仕司註進去正月廿七日辰時近邊山頽落大
井川塞清之間末社宗像社鏡石頽落と云事ハ見ゆ等

六五ふハ衣手社本社の南ふ東面(向)よ在り此御事次よ云べし其第七ふハ四大神(社五本殿郭對殿外北山下と云り相考ふ可き)此御社ハ稲荷五社の中ふる四大神ハ神名式ふ謂ゆる紀伊郡御諸神社是なり然(と申す御在し坐けり其傳二十七行ふ注せり)ハ此ハ大和國城上郡大神大物忌(主)神社名神大月次相嘗新嘗此山を御諸山と云(る其とハ別)ハ其も同神ふ御在し坐るふて大山咋神ふハ御父(伯)市杵島姫命ふハ御夫(兄弟)ハて渡ら(由有て思ゆ)せ給へハ賀茂御祖神社日吉大宮の例思ふ可し若て其衣手社ハ更ふ傳無きを上より次てふ切て去る(攻殺云)ふ如く月讀社ハ御祖父ふ渡らせ給ひ四大神ハ御父(伯)神ふ御在て坐し三宮宗像ハ御祖神ふ坐し櫟谷社ハ(両社)

大神の別社なり如此く六社共よ神縁甚詳るなるふ此衣手社ふ於てハ更ふ考ふ可くんずと雖も今此を推す時ハ其后神ふて渡らせ給ふ可き理なり(杉尾)社説ふ此社昔ハ本社の東の山足ふ在り衣手森と云も有しふ洪水ふ流さ水て社地悉く荒たるふ依て本社の南側の同ど山上なる今の地ふ移祭水りと云り後拾遺集ふ藤原顕輔秋毎ふ誰ふ深らむ主知ぬ韓紅の衣手の森と詠るも此地なり(堀河後百首ふ秋も未だ立来ぬ前よ衣手の杜の下ふハ彷彿ふけり夫木集よ来て見えむ事を頼まむ身ふ有ハ立ぶ侘ぬる衣手の杜又衣手の杜の雫ふ立鹿の心寂しさハ曉の聲又春ハ花秋ハ紅葉と誘ハ水て人も立寄る衣手の森又今も亦涙や誘ふ時鳥我が衣手

の(社)ふ啼あり」と詠るも此地
ふて古き名高き名所あり
神と齊奉る事ハ所以有る御事ふて有けり神名式ふ
謂ゆる丹波國桑田郡大井神社所祭酒(弥)美豆男命酒美
豆女命の由社傳ふ上古ふ松尾の御神鯉ふ乗て大井
川を(泝)ぼり来坐て鎮り給ふ所以ふ此並河村の民鯉を
喰ハず若此を犯す時ハ現罰有りとぞ右の二神ハ
造酒司坐酒殿神社二座(並)ふ酒弥豆男神酒弥豆女神と
式ふ所見たるを松尾大神と云る事甚奇〻ふあるふ
就て聞くふ松尾神社ふも松尾大神日尾の楫を以て
楫ふ作り山田の米を以て御手洗の水ふ浸して酒を

醸給ふとぞ抑此酒〻〻ふ傳十九(六十九丁)ふ注る如く
天ぶ(賣)ふ豊宇加能命ふ始り顕國ふてハ素戔嗚大神
ぞ彼ハ醞酒ハ醸らせ給へるを大物主神を小彦名
神をも酒神と称奉るを世ふ此事を専弘めさせ給
へるハ此事代主神ふこそ御在〻坐ける〻大和志ふ
高ふ(市)郡飛鳥酒殿在岡村上方一大石縦一丈五尺横五
尺石面彫刻槽七道相傳昔沃淵神酒於此と有も上世
ふ此地ふして此神の酒を醸給ひ〻跡處なるも状ふ
るを思合せ考ふ可き御事なり〻今ハ天下ふ酒神
とぞふ云へば此御神の御事と誰〻も然心得又現ふ

其御守護の著明く御在ー坐るゝ然る神代の故事ふ
起ふめける右の日尾ハ本系帳ふ謂ゆる松埼日尾ふ
して上世ふ此神の御在て坐きとゝふ別
雷峯の麓ふて謂ゆる櫟谷宗像両社の立て給ふ所是
ふり山田ハ大中臣定好松尾鎮座記ふ山城國山田莊
荒子山と云る是ふて今嵐山の傍るり御手洗の所在
ハ未考得ずと躍ハ必其近傍ふて有べきるめゝ
○鳴鏑ハ次ふ引る山城風土記ふ丹治失ふて下ふ所
謂丹塗矢者乙訓社坐火雷命在と有る是るり記傳十
四十一丁ふ字鏡ふ鏑奈利加夫良と有る依て訓べー名義
ハ鳴神夫理夜るり天智天皇御紀ふ有細響如鳴鏑と
有る如くふて射ふば空を鳴行ゞ雷ふ似たゝふばるり
蔓菁根の形ふ似たる故の名と云い辭事るり其ハ返

て此鏑ふ似たるゝ彼根とも加夫良と云るり偖
此矢記中ふ往ゝ見えたり古専用ひー物と見ゆ書紀
ふハ目鳴鏑と云も有り八目と云其鏃ふ竅の何許も
有を云ふ和名抄ふ日本記私記云八目鏑後豆女加夫
良と有り雷を唯神とも云へば鳴鏑をも加夫良と
ゝも云べし万葉九九ふ響矢とも詠り此響矢を今本
の訓ふハ加夫良と有り袖中抄ふハ那流夜と有り取意
と云ふき然ふば鳴神夫理夜を切て鳴鏑と云し上を
略きて鏑矢と云し下を略きて鳴矢とハ云るりゆ
り又記傳ふ云く鏑字ハ並ての鏃の事ふゝ分て加夫
良と訓べき義ハ見えず此ハ漢籍ふ鳴鏑と云物此

亦の那理加夫良ふ似たり故ふ此字を當たるなり鏑の一字を訓るも鳴鏑より轉ぜるなり史記匈奴傳云冒頓乃作爲鳴鏑注韋昭曰矢鏑也則鳴と有りと云ふなり

○用ふ古史第七十四段徵ふ都加比多ゝ麻比志と訓るゝ實ふ然る可ー仁德天皇六十五年御紀ふ左右佩劍四手皆用弓矢と有て用字を都加布と訓る是るゝ其六十二年ふ如何來奚用焉とも云め偖此ふ用鳴鏑と云ふ其用ひ主ハ此ふ謂ゆる大山咋神ふ御在ー生て其矢ゝーも火雷神の御靈の如何ふーてら此ふ託御在ー坐ける事次ふ云ふが如ー其ハ記傳十二四十五丁ふ引ける山城風土記ふ賀茂建角身命要丹波國神野神伊可古夜日女生子名曰玉依比日次曰玉依日賣玉依日賣於石川瀨見小川之邊爲遊時丹塗矢自川上流下乃取挿置床邊遂孕生男子至成人時外祖父建角身命造八尋屋堅八戸扉釀八腹酒而神集ニ而七日七夜樂遊然與子語言汝父將思人令歃此酒即舉酒坏向天爲祭分穿屋蓋而升於天乃因外祖父之名號可茂別雷命所謂丹塗矢者乙訓郡坐火雷神在可茂建角身命也丹波神伊可古矢日賣也三村神者蓼倉里三井社坐妖玉依日子者今賀茂縣主等遠祖也と有る右の文と此の次大山咋神中略亦坐近淡蔦野之杉尾用鳴鏑神者也と有と正ーゝ合

せ說て互に小明らかなる事多かり記傳小用字ハ成又化るなどの誤り
若然らば鳴鏑ハ那理坐流神那禮と訓べし又ハ丹字
の誤りて阿加伎鳴鏑なりと云へり其ハ右の風土記
の文の外ハ秦氏本系帳ハ又云鴨上社号別雷社下社
号御祖社戸上矢者松尾大明神是也と有ハ依て右の丹
塗矢ハ大山咋神の化給へる者と思誤へるなり者
なりけり此事を書せる地神本紀ハ更なり羊中行事
秘抄ハ其書を引るなれ此と
同じく用鳴鏑と有る者をや右の賀茂建角身命の要
給ひし丹波國神野神伊可古夜日女命の神野ハ神名
式ハ丹波國氷上郡神野神社頭註ハ建角身命婦伊賀
（葉田郡神野神社）
古弥日賣命也と有る是なり伊可古夜ハ伊ハ發語な
又ハ五十の義なり可古夜ハ謂ゆる鹿兒矢なりて此の鳴
鏑の事ハ緣有て聞えたり其ハ秦氏本系帳の一說ハ
（右百廿ハ本云）

此伊可古夜日女命の御女玉依日賣命の御事を又云
初秦氏女子出菖野河澣濯衣裳時有一矢自上流下女
子取之還來刺置於戸上と云ハ本より誤たる傳なり
〻太秦同祖の秦忌寸ハ蕃種なれば神代の事の係て
云べきハ非ず松尾の秦氏ハ姓氏録山城國神別天神ハ秦
忌寸神饒速日命之後也と有る是なる可し如此考定
め置て其由緣を覓るハ神名式ハ天田郡天照玉神社
氷上郡高座神社有り饒速日命なり高倉下命なり此
を以て見るに伊可古夜日女命ハ其饒速日命の御女
なるなめりけりを其兄弟なりける人即秦忌寸の祖ハ

る事彼玉依日子と玉依日賣と兄弟有て兄ハ賀茂縣主の祖と成り次い丹塗矢の化する神ハ娶て奉る事ハ同じ事なる可し　偖其本系帳ハ右の故事を書て終ふ故鴨上社号別雷神鴨下社号御祖神也戸上矢者松尾大明神是也是以秦氏秦祭三所大明神而鴨氏人爲秦氏之聟也秦氏爲愛聟以鴨祭讓與之故今鴨氏爲祢奉宜祭此其縁也と有て此文の如くハ鴨下上松尾共ハ秦氏の仕奉る所なり偖神名式ハ葛野坐天照御魂神社名神大月次と有を此地を本紀と云て賀茂の相當新嘗紀ハ此より移せる由　社傳なり俗説なり其傳ふる事

久しきを右の玉依日賣の事を色葉字類抄ハ本朝文集云御祖多と須玉依媛命云ふと云るも木島の紀の事と爲る時ハ御祖父此地ハて生坐るなりけり其由縁ハ田て饒速日命の舊地ハ御祖伊可古夜日女命と共ハ此ハ御在坐けるなり然ハ建角身命の御妻と成給ひて其女神ハ葺倉里ハ住給ふ可き事申すも更なり此是本紀と今の紀と有る所以なり若して其秦忌寸姓の氏ハ後ハ其地ハ舊種の太秦氏の住著てより終ハ其下風ハ押ハて賀茂の地ハ退きて其三所大明神を世こふ祀ハりけるを大中臣定好松尾鎮座記ハ元明帝和銅三年四月十一日山城

秦忌寸ハ非ず其國の華曾なりけるを

國山田荘荒子山に賀茂初奉傳云々と有る是彼松尾
埼日尾に松尾大神の移奉る程の事にて右の秦忌
寸都理が賀茂より松尾に住替て祝と成て傳つき奉
る時あり然れば秦氏爲愛聟以鴨祭讓與之と云るハ
此時に相傳へて秦氏ハ賀茂下上の神事に全く抱
くゝず成れゝ者に古ふい秦氏の三所大明神
の祭事を主どると云ひ後に右の如く松尾一社の
祢宜祝と爲て仕奉と云ひ豈異類蕃種の輩を以て定
る事の有るべきや必神代の故事に本著る可き者なり
〻〻然れば秦氏賀茂氏共に賀茂松尾の御神等共に

去るべき所以有る氏人共に有る也猶又神野
速日命に渡給へる證ハ神名式に越後國磐船郡
磐船神社ハ此饒速日命に御在〻坐す事大同類聚方
に毛乃に信藥物部臣等之家傳天磐船神社云々と有
て知るゝ然るに予が門人に泉氏計が越後志に云
る磐船神社今其地を磐船と云事なれども其ハ木
舟社と云て眞の磐船神社の舊地ハ其より近在
に神野村と云地是なりと云り其神野と丹波の神
野と同名にして共に饒速日命に由有を思合す可
中右記に元永二年十二月五日右中辨惟兼朱云鴨
社今度遊宮件御服裝束事被問本社司之所申云以丹波
波御厨年一度所調供來也而自故祿宜惟季時被立加
美乃御厨之間二季調進之と有る加美乃を或人此神
野也と云り又下鴨古文書に未上郡三和荘と云る有
り又和名抄郷名に賀茂に有て何れにても賀茂に
ハ大に由有る事共なり次に玉依日賣於石川瀬見小川之邊爲遊
時丹塗矢自川上流下と云る此地ハ同記に建角身命

の葛野河與加茂河所會至坐迴見賀茂川而言雖狹少
然石川清川在仍名曰石川瀬見小川と有る是小て葛
野河と云い謂ゆる大井川の流小て葛野小て葛野
川と云い桂小至めて桂川と云るゆ其所會を云い今
主殿村と云て川俣と成る處是小ゆ此故事い右の如
く賀茂河の末小て有り事るを秦氏本系帳の一説小其
を葛野河と云傳たゆりるるい其地の相近き小依て
誤小るるゆ爲遊賀茂大神舊記ゆ始遊川上時と云り を本系帳小い澣濯衣裳を見ゆ次小
丹塗矢自川上流下と云るい年中行事秘抄ゆ引る賀
茂大神舊記小有美笛流来依身と有い殊小委しき者

あゆ偖此丹塗矢を云ひ美笛を云るい郎此小謂ゆる
鳴鏑の事小て松尾大神大山咋神の放たせ給へゆ
し御矢なるゆ其物小大火雷神の御靈の添て御在し坐
す物なれ何ども思ゆさぞして放ち棄させ給へるゆ
川上ゆ流れ下らせ給へるゆ右の舊記小依身と
云事本朝文集小ゆ同文小て有り件の丹塗矢い然る
靈物ゆ故ゆ素ゆ其少女小要坐しとして依来
給へるゆ小が其川遊する少女の陰處小立ゆ爲ゆ
る事を云ふゆ古事記自橋原宮段の故事いしも却ゆ
て此玉依日賣命の事を傳誤小る者るゆ其小も美

傳三十卷、日十丁ホ
其長と解こと注
ヨリ出でホ見ケ

右ハ美人の側ニ入れる由なるハ上代ホハ流川ニ木と架して其上ニ屋を作りてハ川上より流れ下りて陰處ホハ之を用ひ其右ホ流れとなる如く流来依身と云事と然れ傳ハ一者なりもり此ハ

和之大物主神見感而其美人爲大便之時化丹塗矢自其爲大便之時溝流下突其美人之陰登と有と依身と云とハ全同ト事なるを顕ホ云とさるとの違有るのミなるを可くぞ所思えたる古事記の右の故事ハ此の傳を誤ホる由傳十二巻八十七丁ホ云るが如し即此第六一書ホ事代主神化爲八尋熊鰐通三島溝樴姫と有る此事を大物主神ホ係ゆ又此鳴鏑の事ホ乃取椙置床邊遂孕生男子と混ひ傳ハ一偏傳なり相副既知姙身遂生男子と云ハ舊記文集共ホ即取之椙床下夜化美男と身元本系帳ホハ女子取之還来刺置於戸上と有り古事記なるホハ乃將来其矢置於床邊忽成麗壯夫即娶其美人生子云云と有て共ホ同ト事有り異なる有り精一

きル粗きル有ホなる本一事の支別ホなるるホハ今通ハ一て説べきるり乃取と云ハ流ホ嘗て身ホ副るを奇ハ一て思ひて取ホるなり其鳴鏑ホ丹土を以て絲色ホるが如何ホ美麗一なりけもホ愛て打も棄ず人知す床邊ホ秘置なり一なる可一偖床と云ハ其臥房を云て常ホ神床なるを云とハ異なるり美男と云ひ成麗壯夫と云るハ其丹塗矢ホ託給へり一大雷神の御靈の顕身と現ハホきせ御在一坐て其玉依日賣命を娶りて相副一給へるなり然ホとル外より来通ひ坐と云ホル非ず唯其矢の化ホるるれば女ハ其夫神の

相似たり事なる者

其美箭化

御名をだに得知り奉らず因より其少女に夫有と云
事は父母の神を始として絶て知る者更に無めゆ
るめり故自然に姙ひと思ひ夫無らして子持めき人皆
不審して思ひける事と所見たり此男子は即舊記文
集等に謂ゆる山本坐天神御子と申す是なて神名式
に謂ゆる豊岩郡片山御子神社即片岡の御神の御事
なるを下文に此の二書に彼別雷神と爲るは全
く傳の誤る事已に上百十丁大山咋神の下に注す
事共を見て曉る可し此事昔より誰も思誤る事あり
ゆて深く心を用ひざるが故なるべし或人瀬見川と
題して此風土紀の事を注したりしうども其神系

の係る根元より正しく辨へざる故に謂ゆる杳を隔た
る者なして大に予が意と異なり殊に秦氏本系帳
に戸上矢者杉尾大明神是也と云ひ此より用取て殊
更に其に泥しけるあや此丹塗矢
者は大山咋神の王依日賣に逢給ひし料に御靈を託
て用ひ給へる物實なるべしと云るは笑ふ可し松尾も賀
茂も同じ山城にて殊に境を接へたりと云ふ程の事
なるに又其女に娶給ひしなど云ふ通ひ給
ひしなど殊更に丹塗矢に化して給ふ何の用ぞ
や其上に生坐る御子の言に天神御子と申へふ名乘
りを給へるを何と思ふ至成人時は其御子の老なるを物の心
を知給ふ程に成りて給へる御時を云るめり旧記文
集共に遂生男子不知其父と有る如くにして其父を知
る者更に無めりるめり次に外祖父建角身命造八尋屋
竪八戸扉醸八腹酒而七日七夜樂遊と有は旧記文集

共ニ於是(爲)知其父乃造宇氣比酒(タ)を有り此事の委
きるるが右ハ九宇氣酒(タ)を甚奇〻しき事あり此神功
皇后十三年御紀ニ釀待酒と云称有が如く其ハ人を
待請る料あるニ依て号ケ此ハ誓ひて其父を知むと
して釀る故ニ宇氣比酒とハ云め作ハ尋屋堅ハ戸扉(を云)
其集へニ集ハす。神等の中ニ其父神ハ御在むを其
宇氣比酒を含呑て終ニ其顕ハ(れ出来坐す事ハ有む)を見てもとるめ
此地ハ今の御蔭山(を)云ふめ或書ニ御蔭山一名御
生山と云し花鳥餘情ニ玉依姫の別雷神を生給し
所あり御生(ミウム)とも御形(ミカタ)とも有ハ更るめり右記寛仁

二年十一月廿五日條ニ昨日下社司久清進解文孫舊
記皇太神初天降給ニ野郷大原御蔭山也と有ハ御祖
社を其玉依日賣命と取違へたる誤傳を乗たるニハ
有ハ〻ども其初天降給と云ハ此ハて(其玉依日賣命の)其男御子を生給
へり〻事と事替りたる状ふて傳ため〻者るめけ
偖其御蔭と云ハ推古天皇二十年御紀歌ニ阿摩能柳
蘓訶礙と有ハ天之八十蔭と云事ハて天之八十殿と
云事るを以思ふに此地ニ初玉依日賣命を産屋を
建給ひて(御子生坐ニ依て御生出の称有り又)其後ニハ尋屋を造て宇氣比酒を釀〻諸神を
集へて七日七夜宴樂を爲給へり〻故を以て御蔭山

ニハ云るゆて本其八尋屋ゟ起りて御蔭山とハ云ふ
ゆゆめ先ハ御蔭山と云ハ賀茂御祖神社の荒御魂
を祀るゝむ和名抄神靈類ハ靈日本紀云
美太萬一云美加介と有ハ臨時祭式ハ凡往古社長門
國封和穀者令封戸徭夫運送云々但豊浦郡封戸徭夫
者便留充御蔭社と有る御蔭社ハ神名式ハ謂ゆる往
吉荒魂神社の御事なる由傳十巻四百十一丁ハ法る
が如し然る時ハ此の御蔭社ゟ然る例ゟや思ひ
なぞゟ記ハ御生山の名有る上ハ然ハ云難し正治百
首ハ御生山何代の雲い霧隠て知ぬ昔の今日ハ逢
ひ風雅集ハ久方の天盤舟漕寄せし神代の浦や今の
御生野夫木集ハ御生河賀茂の御力代引替て今将年
の神を祈ゝむるゞ山を野を河を云の此社此
叡山の西麓ゟ在り所祭神二座神秘也と云ゟ此
故事ハ依る時ハ玉依姫命と御子神と二柱なる可
し夫木集ハ葵草様なるや御蔭の山の諸葉草長き代係て
ハ所見けり又當昔の御蔭の山の諸葉草長き代係て
我や頼すむ此歌を現存ハ帖ハ同人の詠ゟ上句
當昔の日蔭の山の諸葉草云ゝと有て御蔭と日蔭と

相通ハ云り然與子語言汝父將思人令飲此酒ハ舊記文集
共ハ乃造字氣比酒令之子持杯酒供父ゟ有ゞ如く無心
ある兒ハ杯酒を持しめて其飲しむる神を以て其を
父神と定給ひしとの御設ふて是其酒の字氣比酒ゟ
る所以るゆ秦氏本系帳ハ於是女子無夫姙既而生男
子也父母怪之責問爰女子答曰不知再三詰問雖經日
月遂云不知父母以謂雖然無夫而無生子之理也我家
往来近親脊旗隣里鄰賞之中其夫應在因茲辨備大饗
招集諸人令彼兒執盃祖父世命云父止思人ハ可献之
ゝ見ゆ此時の狀實ハ如此くるる可し古事紀水垣宮

段ふ丸此と似たる事の有ふ其美人姙身ふ父母怪其姙身之事問其女曰汝者自姙無夫何由姙身乎答曰有麗美壯夫不知其姓名毎夕到来供侍之間自然懷姙是以其父母欲知其人誨其女曰云云と有る如く此ふて也始ハ父母其女を問紀一已ふ其男子を生る後ふ已ふ成人てハ其母子共ふ其夫を隠一父を顕ハさざる事と思ひて問ふ紀一ふ爲たりけめども愈其實ふ知ざる事を知得て今度ハ其字氣比酒の事ふハ及びため一者ふめりけり但右ふ引る古事記の故事ふ此の傳ふ分ぬたり一者る其ハ傳二十卷百十丁ふ云てむを其所ふ就て辨ふ可き者ふめり一世人ハ

然る正一し何ふ無き ふむ拙き事ふめりける 即舉酒坏向天爲祭分穿屋覆而升於天ふ有る迄ハ古文ふ次ふ因外祖父之名号可茂別雷命と有ハ大ふる譌ふめり次ふ云べ一舊記文集共ふ此子持酒盃椀上於天雲而云吾天神御子乃上天也と見え本系帳ふ丸干時此兒不指衆人仰觀行指戸上之矢即爲雷公拆破屋棟升天而去と有て大抵同ど今此を一ふ一て云ひふハ上言汝父時思人令飲此酒と有ふハ本系帳の干時此兒不指衆人仰觀行指戸上之矢と有る文此ふ次べ一其字氣比酒を父と思ひて飲一む可き神ふひ非めけれハ其美男と化て逢給

へめ〳〵丹塗矢を始い床邊ふ置たり〳〵を後ふハ戸上
ふ挿置め〳〵其矢を仰觀て此こゝ父と指給へるゐり
次ふ向祭(天)爲祭ハ其矢の方を指て祭を爲給へるゐて
豫てハ其御祖より彼矢の化り給る神ふ逢給へめ〳〵事
を聞置め〳〵うハ(其宇氣比酒ハ其戸上の矢ふ向して公事根源ふ此矢を取て我家の屋根ふ挿ムと有を考ふ可)
奉給ふ可き事ゐめ舊記又文集ふ此子持酒盃振上於(而升於天)
天雲と有ハ此事を形容めて云るゐり分穿屋甍ハ其
戸上の矢ふ向ひて宇氣比酒を捧げて宇氣比申させ
ゆむを其丹塗矢の御雷(靈)ふ御在〳〵坐す火雷神聞食〳〵
て其御子の父不知めて世ふ漂ふゝ御在〳〵坐すを

今按ふ此文を日本書紀一書曰として引るハ兒云五百父有天也穿屋甍而御父を知せ給いさめ〳〵御子れ誠ふ吾父有天と申給ひて事ゐ稽りたるを見べし

御心苦〳〵く所思〳〵て彼火產靈神の御心一速じ荒じ
坐す御靈をや更ふ添給へりけむ今迄御子と思ひ〳〵
ふハ引稽て忽ふ大るゐる御稜威の加ゝ〳〵せ御在〳〵坐
て御父大神の神積め御在て坐す高天原の方ふ天雲
の五百重(搔)搔別て飛上め去給へるゐめけり故本系帳
ふハ即爲雷公拆破屋棟升天而去(と)ハ云め然ハるゐ
其雷公と云ハ其屋甍を分穿ち拆破めて上め坐〳〵御
稜威の一速く神(御)在〳〵坐ふ依て然申成せるふこゝハ
有ゆ〻實の雷ふハ非る事申すも更るゐり此ふ就て別
雷神と申す事ふ心得なるハ實ふ古人の附會ふて此

相似たる事にて其よりも醴酒と出たる是なり

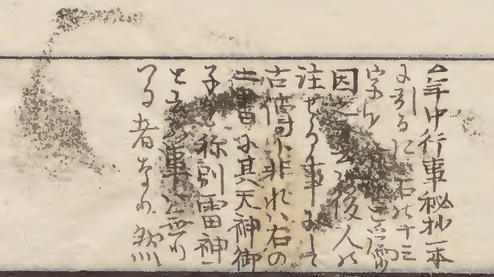
御子即片山御子神にて渡らせ給へる御事を忘れ果
たる者なるべし
御父大神を火雷神と申奉る雷は右に
同じ記傳五巻建御雷之男神の下に美
迦は伊迦に通ふ言なり其伊迦は厳矛重日伊賀志御
世又伊迦米志伊迦志などの伊迦なり其美迦を通ふ
例は祝詞に此神を健雷命と有り又厳きを美迦と云
る例は仁徳天皇御巻の歌に弥箇始報と有は厳めし
き潮なり又甕星は厳きをいひ甕栗も厳栗なり都知
は津持なる也と云れたる是にて其質の雷には非ざるを
思合すべし乃因外祖父之名号可茂別雷神命は上に謂り
可し△
る賀茂建角身命にしも玉依日賣命の御父に坐せば
即外祖父に御在し坐す（此片山御子神の御爲には）（すが故に其）此御名に冠らせる（申す）賀茂（の言）を
添て此にも可茂別雷神と申す由なるが其賀茂の事
は然も有べき事ながら此に別雷神を其御子の御名

△猶日本靈異記下に諸樂宮廿五年治天下勝宝應眞聖武太上
天皇召於大納言藤原朝臣仲麻呂而御前召詔之朕子阿倍内親
王與道祖親王二人以之令治天下欲云何是語宜受不也仲丸答白
甚勝能御語受白之時天皇勸御酒令飲然詔若朕詔違
勅失之者天地相憾被大厲汝今可誓時仲丸誓白之若我後世違
勅語之天神地祇憾嗔而被大災破身滅命此是合誓言飲酒
已訖然而後天皇山崩之後如彼遠勅以道祖親王爲儲君云々と有
を後に此誓言に違ひ給へるに依て大災有しかなり然して祈禱を
有けるにと注せり倍此祈酒と云は右の如く神祇を祭り誓言を
云て盃結ぶを爲る料なるを

別雷神鴨下社号御祖
其別雷神と申すは上五百
同神に御在し坐て即
古丹波國の湖なりし時國体
を見行はし御在し坐て山を劈き土を分て大井川を
通して國作り爲給へりし御功用に依て負坐る御名
にて即分土の義に御在し坐る其厳しき御徳を称へ
て別雷神と申奉り又下社を御祖神と申奉れる其
神の御父母大己貴命玉依姫命同名異神にして此御
子の御祖の玉依日賣命とは本より異なるを其御子

御子即片山御子神ふて渡〳〵せ給へる御事を思ひ果たる者なるべし御父大神を火雷神と申奉る雷ハ右ふ同ド記傳五巻建御雷之男神の下より美迦ハ伊迦ふ通ふ言なるべし其伊迦ハ巖寸重日伊賀志御世又伊迦来志伊迦志ふなどの伊迦なるべし其美迦を通ふ例い祝詞ふ此神を健雷命と有り又巖きを美迦と云る例い仁徳天皇御巻の歌ふ弥筒始報と有ハ巖めし き潮なるべし又甕星ハ巖きをうひ甕栗も巖栗なるべし都和ハ津持なる也と云ふ是よて其實の雷ふい非ずを思合す可し乃因外祖父之名号可茂別雷神命ハ上ふ謂ゆる賀茂建角身命ハ〳〵も玉依日賣命の御父ふ坐せバ即外祖父ふ御在〳〵坐す此御名ふ通ふ〳〵せる賀茂を添て此ふも可茂別雷神と申す由なるが其賀茂の事ハ然も有べき事なるべし此ふ別雷神を其御子の御名と爲ハ本系帳ふ故鴨上社号別雷神鴨下社号御祖神と云る共ふ甚ド誤なるべし其別雷神と申すハ上百五十二ふ注るが如く大山咋神と同神ふ御在〳〵坐て即事代主神の御事なるが古丹波國の湖なるべし時國体を見行〳〵御在〳〵坐て山を辟き土を分て大井川を通して國作り爲給へり〳〵御功用ふ依て負坐る御名ふて即分土の義ふ御在〳〵坐る其巖〳〵き御德を称へて別雷神と申奉り又下社を御祖神と申奉りるハ其神の御父母丈已貴命ふ依姫命同名異神ふ〳〵て此御子の御祖の玉依日賣命とハ本より異なるを其御子

の屋覆を分穿ち拆破めて天小上め坐ーを以て爲雷公と有を一小ーて上社ハ其神ゐめと思僻め其御祖の玉依日賣命と事代主神の御祖の玉依姫命と御名の同じきく下社をも其神と思違へたゐーー者ゐめ故風土記の下文小可茂連角身命也丹波神伊可古夜日賣也玉祖依日賣也三柱神者蓑倉里三井社坐と云ふ慥ある證文有る上ハ右の本系帳の說ハ難立く又風土記小其御子を可茂別雷神と云も立べうくざる者ゐり舊記又文集等小此子持酒盃振上於天雲而云吾天神御子乃上天也と有ゐも其正ーきを得たゐける



又其結文小因之山本坐天神御子称別雷神と有る称別雷神の四字ハ佗傳小依て混たる者ふい有ゐども山本坐天神御子と申せるゐ神名式小謂ける愛宕郡片山御子神社大月次相の御神小御在て坐ける文德天皇實録小齋衡三年五月朔戊辰山城國片山神列於官社兼預相嘗祀清和天皇實録小貞觀元年正月廿七日奉授山城國從五位下片山神從五位上と有ゐ是ゐり左經記(1)寛仁元年十二月一日條小大閤云行幸日河合片岡貴布祢三坐明神可奉增神階云ゝ同三日條小大外記文義云河合片山貴布祢被奉增正二位

と有る是即片岡神ふ御在し坐す證なり偖神中抄ふ
中賀茂とハ片岡社なり」と云ひ詞林採葉ふ九片岡社
をバ中賀茂と申す」と云ふハ賀茂別雷神社を上賀茂
と申し賀茂御祖神社をハ下賀茂と申奉るふ並べた
るふて實ふ以縁ふ〻ぬ御神ふ御在し坐を以なり神祇
靈應記ふ上賀茂波別雷神止申奈利下鴨波毋奈利中
賀茂波御子奈利と云て下鴨の御子と云ハ誤なり
其三井社ふ坐す玉依日賣命の生坐る神ふる由の傳
と有て云るふて申くふ面白き事なり此御社上賀茂
社の樓門の外ふ小川有り其橋を片岡橋と云る其東
ふ山ふ傍て南向ふ立て御在し坐て其後ハ謂ゆる片
岡山なり上社ふ程ハ近けれ〻〻中賀茂とハ必謂つ
事可き事なりし或書ふ千載集賀茂祐平政平歌ふ然
りとも頼ミぞ係る木綿縫我ゞ片岡の神と有ふ依
て称吾片岡神者可知賀茂縣主祖神玉依彦命也と云

るハ別ふ氏神社有を知ざる推度なり又神社本記ふ
加茂別宮片岡大己貴命と云ひ石の下上の中ふ素戔
嗚大神ふどの御在し坐ぶこと其ふ對へて御子とハ
申さめ甚と當らぬ事なりけり又神名式ふ備前國邑
之郡片山日子神社有を社傳ふ大山咋神亦名片山日
子命と云るハ右の別雷神大山咋神同神ニ坐を彼玉
依日賣命の生給へる天神御子の事と心得たる〻〻
其別ある事を強て一ふ成せる者ふて誤ふる事論を
待するひ所謂丹塗矢者乙訓郡社坐火雷神在と有ハ即此の
鳴鏑是ふて其始大山咋神の射放たせ給へ〻し〻ば石
川瀬見小川ふ流れ来る時し〻玉依日賣命の川遊び
爲なりけるふ其身ふ依副なりけ〻ば取持歸めて其
床邊ふ置なりけるを其御矢の美男ふ化〻せ御在し
坐て其女ふ遇給へ〻ゆ〻を女も其矢の化れるとハ

知ざめけむるゝ後ふハ其屋根ふ掃ゝ置なゝるふ其御子の御父を知ひ爲ふ宇氣比酒の事を行ハ〜めけれバ其屋上の矢の方ふ向ひ祭を成〜て大ふ上ゆ衣給へるを以て其始ハ其御妻玉依日賣命の御許ふこゝろハ齋ひ秘置給へりけ〜〜〜即神名式ふて訓郡

ゆ乙訓坐火雷神社名神大月次新嘗と有る是るゆ此御社の御事ハ已ふ得十二ハ八十ふ委〜〜注〜奉ゝ〜ゞ今云ふ限ふ非ず秦氏本系帳ふ戸上矢者松尾大明神是也丹塗矢を松尾神社の神体と云ハ大る異説あり其矢を放給ひ〜こゝろハ松尾大神ふ御坐〜坐ゆれ其矢の所在ハ即此火雷神社る事其御子を天神御子と申奉るゆて知べし其松尾大神の御子を天神御子と

ハ何を以て申奉るゝ然れども秦氏の三所大明神を奉るハ甚謂ふ有る事ゆり上百九十六丁ふ云る事共を見て知べきるゆ可茂建角身命也丹波神伊可古夜日賣也玉依日賣也御柱神者蓼倉里三井社坐と有る此玉依日賣命ハ彼火雷神の丹塗矢ふ化て逢給ひ〜御妻神ふ御在〜坐ゞ故ふ其天神御子と申す吉山御子神ふハ御祖神ふ坐ゆ故本朝文集ふ云吾天神御子乃上天也と有る文ふ續きて于時御祖神等戀慕哀思夜夢天神御子云各將逢吾造天羽衣天羽裳炬火祭鉾待之又謂走馬取奥山賢木立阿禮恵種（実垂）と緑色又造葵楓蘰叢謂待之吾將来也御祖神即隨夢教令祭彼神神祭用走馬

并葵蘰楓蘰此之縁と有る是なり斯て此三神の鎮坐す社と賀茂御祖神社（其賀茂別雷神社の御祖ハ坐故ハ其）とハ殊異なる事あて釋紀ハ又山城風土記曰蓼倉里三身社称三身者賀茂建角身命也丹波伊可古夜日女也玉依日女也三柱神身坐故号三身社今訛云三井社と云り然ハ其片山御子神の御祖ハ此三身社の御神ハ御在ー坐す事論を待ず然るハ賀茂別雷神社片山御子神社相隣の賀茂御祖神社三井神社相近きを一方ハ共ハ御子神ハ坐ーー一方ハ共ハ御祖神ハ坐ス故ハ古より今ハ至る迄久皆誤来ル事なり偖右ハ引る文の如く謂ゆる葵祭と

又杉尾社日吉社ニ其葵ヲ以て祭トスルモ皆右ノ如ク

偖又賀茂神官ノ御所ニ御子神ハ坐ス事ハ其ハ小御子神ハ坐ス由ハ著て葵祭の縁ハ用ル事ハ大同類聚抄三十四葵蘰生於水中二葉葵山城之加茂御山ハ阿布比草寸水二火太と天阿礼今之日吉川ハ也能ハ波也尔用ル流婆辛丁辛未流止其神ハ生葵

云事も此片岡神ハ始めたる御事なりと其別雷神も鳴鏑を用ひ給ひし神ハて始終共ハ由縁深き神ハ坐を以て仕奉ればなり終ハ其別雷神（又御祖社）の祭とのなり人皆思ふ事と成るなり夫木抄ハ賀茂祐挙片岡や齋垣の端の葵草今日挿さでハ唯ハ挿さむと詠るむ能古實を知たる歌と云べき者なりー右の蓼倉社（里）ハ和名抄郷名ハ愛宕郡蓼倉多天久良と有を山城志ハ已廃有下賀茂田中二村と云ひ京都古圖ハ蓼倉田中里と有る是を云なり其三身社ハ神名式ハ同郡三井神社（但鴨脚家系ハ味耜高彦根命十四世孫田主臣ニ賜姓）名神大月次新嘗と有を臨時祭式ハ御井と書せるを以て其

唱を知べき者なり下鴨社元應二年造營遷宮の古文書ニ三所社壹半と云ひ延文二年の文書ニ御結神事云々と云事の有ハ皆當社の御事なるが三身の說い右の風土記の如く三井ハ三居ニて三神の並坐す由なり三所社ハ三柱社の謂なり御結神と云ハ名勝志ニ三井神社の事を云ふ塚社在河合社門前北向一棟所祭三坐神也と云る三塚と同く三番の由なる可し但延文の古文所なる三所社ハ此とハ別なりと見ゆ同書御祖神社條ニ三所社在本殿圖外南向三社雙立と有る是ニて三井神社とハ別なり社家說ニ中賀茂三井社也元坐蓼倉里在下賀茂東北之地高野川之西と云り然ればも中賀茂ハ神中抄詞林采要共ニ片岡社と云ハ三井神社なりてハ叶ハず偖此御社

合社南方坐三坐北向と有る此

元ハ其蓼倉里ニ御在坐しを後ニ御祖神社なりハ南ニて河合社の前ニ移し祭りしと云り此三身社即片山御子神の御祖神ハ坐せバ其御祖神社と一ニ心得べからず右の如く風土記ニハ乃因外祖父之名号可茂別雷命と云ふ混ル有り本朝文集賀茂大神舊記等ニも因之山本坐天神御子称別雷神と云る後の加筆有り秦氏本系帳ニハ即爲雷公云々と云を案て故鴨上社号別雷神下社号御祖神也戸上矢者松尾大明神是也と云て上社の別雷神下社の御祖神を其天神御子片山御子神と其御子の御祖玉依日賣命の御事ニ混し其矢ハ火雷神社ニ坐を松尾神社の御事と爲るゆゑ共ニ正しき傳ニ非

るハ一ハ賀茂氏の本系帳ゑどより混じ一ハ秦氏本系帳より紛ひて家々の口傳異なるゆ故ふ合ざるゆ然のみならず此記ふ見る其大山咋神をして大年神の御子と傳誤ひるゆ故ふ此ふ用鳴鏑之神者也と有も真の古義ハ知ひずして成以て行て終ふハ大山咋神の其矢ふ籠給へる御靈の化て玉依日賣命ふ娶給へる事とさへふ識者の惑ふふ至ひるハ甚遺憾き事ふるを以て此記を説くふ彼社説をも侍せ説ずハ得有べからず故是を以て思ハず長々しき諄言をゆ爲たゆける石ふ舉たる因の文ふ妹玉依日子者今賀茂縣主等遠祖也と云事有る説ふも及ぶ可きゆ

ども此ハ用鳴鏑之神者也と云ふ就て彼丹塗矢即是る事を明らめもとての業あて餘事ハ云べからざる所ゆを石ふ引る古記共を正し辨ふふ非ずて ハ終ふ其事を究し可りからさるゆ故ふ諄言ハ爲たるふこそ有けひ此ふ用無き事ハ神武天皇二年御紀又頭ハ忍烏又入賞例其苗裔即葛野主殿縣主部是也と有る下ふ云べし ○庭津日神ハ下ふ庭高津日神と有ル共ふ一神ゆり又ハ庭火神とル庭火皇神とル庭高日神とも申して此ハ上百四十六丁ふ注し奉るゆ如く此記ふ奥津日子奥津比賣二神を合せて此者諸人以拜竈神者也と有る其竈神を称奉る御名ゆり偖庭ハ傳十五百三十九丁十九四十ふ注る平坦ふして凹凸無き處を云称ふて廣くハ地上の障無きを云び海面の和たるをル

云事ふて和名抄居宅具ふ庭和名迩波屋前也と有ハ垣墻
の中の平坦なる處をゝ云ひ万葉四十八ふ庭立麻手刈
干十三十九丁ふ尓波ふ多都安佐提古夫須麻と有を其
九三十二丁ふ小垣内之麻矣引干と詠る是なり然るふ此
庭津日神の庭ハ其宅内なるふて謂ゆる土間を云ふ
ゆ万葉二十二十二丁ふ尓波奈加能阿須波乃可美尓と詠
る類是なり偖今ハ人家の土間ふ竈を築きて淡路ふ
どの方言ふ久度と云る者ふて其後ふ穿てる穴を以
て名と爲る事なり偖竈と云ハ床上なるを庭中な
るを以ふ揔云て廣きを其久度ハ唯土間ふ居るの

ふ神の主ゝゝせ御五坐す御事ふ於

ふ鼎と鑄と事異なると

ふ庭火と云と聞えたり續紀ふ天平三年
春正月庚戌朔乙亥奏庭火御竈四時祭祀永爲常例と
見えたる此御竈ハ大炊寮なるふて天智天皇十年御
紀ふ謂ゆる大炊寮有八鼎と云る是なる由上百四十六丁
ふ注るが如し然して右の御竈庭火ハ内膳司ふ御在し坐
す御竈神ふ渡らせ給ふ事次ふ注し奉るが如し但同
し御竈神ふハ御在し坐せども如此く称ハ別させ給
へるハ其床上ふ在と庭中ふ在との差別なのゝふて始
より其分由緒の別ふ文徳天皇實録ふ齋衡二年十二月
るふハ非るなり
丙子朔大炊寮大八島竈神齋火武主比神庭火皇神並
授従五位下同天安元年夏四月戊辰朔癸酉有勅大炊

寮大八島竈神内膳司忌火庭火神並授従五位下と有
る此二共ニ疑有り然るハ齋衡の度の庭火皇神ハ内
膳司ニ坐神なり（内膳司庭火皇神と有けむが脱たる可し然れども）天安の度のハ共ニ同し従五位下
るハ先ハ唯勅有るのみして後ニ位記を奏ス
べけるなり有べし故四時祭式六月祭十二月條ニ（准此）
忌火庭火祭（中宮准此）云ヘ右大殿祭事官主於内膳司行事
十一月条條ニ供新嘗料云ヘ右依前件其御贖大殿忌
火庭火等祭料並准神今食と有て神今食新嘗等ハ
三度の御祭ニ就て忌火庭火の神等を令祭給へるハ
其内膳司ニ渡ス給ふ御神等なる者なり但此司の

又記略ス村上天皇
康保三年八月廿六日
戊午内膳司正四位下
庭火神従三位ニ

忌火神も大炊寮の竈火武主比神ハ（の大）八島竈神ニ
就て被祭ス給へるなりて此ハ庭火神ニ就て共ニ其
祭ニ預ス給へるなり故三代實録ニ貞觀元年正月
廿七日甲申奉授内膳司従五位下庭火皇神従五位上
同九年正月廿六日丁卯授内膳司従五位上庭火皇神
従四位下元慶二年七月八日辛丑授内膳司従四位下
庭火神従四位上と有て此三度ハ忌火神の神階共ニ
庭火神のみ預ス給ひて却りて忌火神の預ス給
ハざるハ大炊寮ニて竈神を主とし内膳司ニてハ
庭火神を主として寮司共ニ忌火神ハ其従祀の如く

（常ニハ忌火庭火と申す欠等なり）

ふて御在し坐ゞ故ありけり竈を御体として齋奉ら
せ給へるふて此六月十二月の神今食十一月の新
嘗等ふ仕奉る由以て称奉りるるり江次等ふ六月一
日供忌火御飯と事有を抄ふ六月一日十一月一日内
膳司毎至神態鎮火炊爨謂之忌火と云し公事根源ふ
も内膳司のの奉りるを大床子の御座ふて供するふ
ゆ景行天皇御時より始ゝる忌火と云火を忌む心ふ
ゆ神事ふゞの時ふハ不浄の火を打昏る事ふゆ是月
神今食の御神事を今日より始ゝるゝ可し」と有
り但景行天皇の御世よりと云事を高橋氏文ふ豊日
連手今火鎮天此手忌火止爲天伊波比由麻閇天供御
食ゝ也有を始と心得させ給へるゝめど然ふ非
ず神武天皇戊午年御紀顕齋の所ふ又火名爲歳香来
雷と有も忌火の意味ふて神代より行ハせ給し来ル
る御神事ふゝ事申すも更るゆ斯て此忌火神ハ火産
靈神を称奉ゆて竈神ふ御力を日本紀略ふ天徳四年
合せ給ふ御靈を申奉る是ゆり
十一月十九日今夜坐内膳司忌火庭火等御神奉遷冷

泉院内膳仍權大納言師尹卿以下奉遷之平野謂祭二
口也庭火謂鎮二口也各有蓋長櫃等衛府持之奉移院
乾方新屋庭火平野別屋也安置之後宮主申祝詞と
有て摠て御竈三口ふる中ふ（其二口）ハ庭火ゆり其二口を
平野と申す中の一ハ忌火ふて渡ゝせ給ふゆり中右
記ふ内膳（炊）所御竈神三所也平野件奚御祭奉仕神也一
所庭火是尋常御飯奉社神也一所忌火是則十一月新
嘗六月（十二月）神今食祭奉仕神也と有ふて紀略ふ平野謂祭
二口と云る其一口ハ忌火ゆる事知ゝるゝゆり建暦
御記ふ竈神行幸他所之時中納言以下供奉尤可爲靈

物女房不忌之男主上之外不沐浴也四五破但指合用之不可說物也と有り階梯ふ按自神代所傳鑄有定三日鑄三日一称平野陰陽師奉仕祭御祭一称齊火六月十二月神今食十一月新嘗祭等奉仕御飯一称庭火尋常御飯と奉仕之と注し給へるハ次ふ引る増鏡ふ依て注させ給へるなり百練抄ふ後深草天皇寶治二年十月廿二日内膳屋焼亡御竈神焼損給廿四日近日御竈神焼損可鑄改哉否事被問諸卿十一月十九日斬廊御ト内膳竈焼損事也閏十二月廿二日被定内膳御竈可鑄改日時定来廿八日と見えたる此時の事を増鏡四十四ふ内膳屋焼て神代より傳ふる御竈も焼損ハれゆるをゞ甚淺ましき事ふハ申侍ゆ彼竈ハ昔ハ三有ける一をバ平野一をバ忌火一をバ庭火と申ける圓融院の御代永觀の頃二ハ失ふゆり今一残ゆたるふ斯る事宜しからぬ業なりとて神祇官ふ尋られ古き事共考らる平野と云ける陰陽寮ふ居て祭祭と云事ふ用ひゆゆと申頃より彼祭い絶ぬ忌火と云ふてハ六月十二月の御神事の御膳を調ゝけり庭火ふて一の御膳い仕奉ゆの斯ふハ甚戴(タイク)しき事ふて始て鑄物師ふ仰らる可しとも申し古きを損ぬなる所ゝを直さる可しとも色ふ定の難

られなり入道太政大臣猶古きを直さる可しと申さ
るるぞ聞えゆる所見たり右ハ自神代所傳と有
る實ハ神代の舊物ハて重き神寶と聞り鑄之口の下
ハ有足云錡と注されたるを思ふハ大炊寮の鼎の狀
したる物ハて謂ゆる釜を懸る金輪と云物ある可し
（ハ然ハ鼎の事）
建暦御記ハ四五破指合用之不可說物也と有る四五
破ハ（其常をえて）破損ぬたる由ハ非ず（本ハ大なる物ある可るけれい）四五ハ割て別々ハ鑄立た
り物ある可し指合用之ハ其用ふる時ハ臨て更ハ
組立るを云ふ不可說物也ハ上ハ尤可爲靈物と有ハ
對へさせ給へるハて世ハ在る寵類と云ハ甚く異なる

御物ハて御在し坐との御事とるむ伺奉ハ侍る指合
と云ハ食入るを云ふ和名抄金器類ハ銚鞘色立成云
銚子佐之奈閑俗云佐須奈信云と有り指鍋と云る
ハて柄を指たる謂なり右の指入り此例ハ等しく四
五ハ鑄分ちたるを一ハ寄せ合するを云る可し偖
右ハ金輪と云ハ俗ハ謂ゆる五德と云物の事ハて今
も神社ハどハ湯立を行ふ時ハ釜を懸る具ある是ハ
り又ハ鼎ある（むと云るハ同抄ハ鍔ハ作鐺漢語抄云
阿之奈信鮨而所欣之飯謂之鐺飯ハ鼎也鐎温器三足
有柄也と有る是なり右の四五破ハ三足と上の釜と
を別ハして時ハ當りて指入るなり然れば此物なや
當る可
うひ偖此錡三口の一ある平野と云ハ神名式ハ山
城國葛野郡平野祭神四座（並名神大月次新嘗）と有を今ハ木神久
度神古開神比賣神ハ有る其第二久度神是なり祝詞
ハ天皇我御命ハ坐世久度古開二所能宮ハ之豆供奉来

流皇御神能廣前ニ白給久皇御神能乞此給万比之任ニ
此所能底津石根ニ宮柱廣敷立高天能原ニ千本高知
氐天能御蔭日能御蔭ニ此定奉氐と有る此本社ハ神名
式ニ謂ゆる大和國平群郡久度神社是なり其久度と
云ハ上百四十五丁ニ引る和名抄ニ竈和名加萬炊爨處也窓和名
久度竈後穿也と有て竈ハ前面火を焼く口を云し久度
ハ後ニ烟を漏す穴有を云て一物ニ二称有ニ非る事
竹取物語ニ竈を二重ニ爲隱めて中略久度を開て と有
て久度ハ本より竈名ニハ非るなり然ども雖ニ竈神
四座窰神四座と有る窰ハ和名抄の窓和名久度と有

る是ニて一ハ例の竈神一ハ久度神ニて此の庭火神
ニ當る可うらむを何を以て竈と云し庭火と云てふ
くバ竈ハ鼎ニて今俗ニ云ふ風呂と云物の如く窰ハ
庭ニ居て火を焼く物なる故ニ庭火と云なり偖此
内膳司の鑄を平野と云ハ其久度神の神体の御竈を
模造されたる謂なる可く古開神と申すハ上古ニ鑄
替られたる舊物を牧給へる御名ニて有けめ偖階
梯一称平野の下ニ陰陽師奉仕癸御祭と有ハ簠簋内
傳と云物ニ丙丁日不祭竈神と云ニ就て(堀河天皇寛治八年十二月三日の下)丁の癸日を
取て祭る由なる可し中右記ニ御竈神長德三年三月

十一日藏人信經私記曰今日雨降又召官立令奉御祓
御厨司所並内膳司 御詞曰陰陽寮依例奉仕癸御祭而日来之間
奉仕之勤不如法也此由所不知食也爰日者御膳非例
仍令召申之處御竈神祟之奉致者此由可校申者宗任
奉宣旨向彼司奉仕御禊還令奏聞云云内膳司御竈神
三所也一所平野件癸御祭奉仕之神也一所庭火是尋
常御飯奉仕之神也一所忌火是則神也十一月新嘗六月十
二月神今食祭奉仕之神也而癸御祭不如法之由欲祓
申之處件平野神無所在仍召問司官人申云件神圓融
院御時爲人所盗取依件神事○朝事改以後納置内
臣被除籍云云

膳御戸宅内是有事危之上依無神殿也者因之日来於
庭火神御前奉仕件癸御祭云云是尤乖舊規則奏聞事
由宣旨曰隨兼信所申之旨如舊跡可奉仕者仍召修理
職官人等仰造之神殿之由召陰陽師時晴明光榮等令勘
申可立神殿之日時畢昨日依左大臣御召兼信奉仕御
祓と有て頻ふ癸御祭の事を沙汰せ〳〵れたりい此御
竈の神代よりの舊物ハ平野神社ふ留ふ〳〵せ御在し
坐て内膳司ふ坐ハ其御模造ゑりつ〳〵むを其ゆ已く
陰陽師の手ふ渡めて癸御祭の御体と成し奉ゆるの
ゑるゆが故ふ其所在さへふ定ゆ〳〵せ給ひざるふこ

うハ有けめ朝威の衰へさせ御在ー坐す世中と成て
ハ摠て浅ましき事のミなりしぞ但右ハ引る紀
略ハ平野謂祭二口庭火錡一口也と有て上ハ坐内膳
司忌火庭火等御神と有を對へ見るハ平野と申すハ
忌火神ハて謂ゆる齋火武主比神の御体(あるハ)
御在ー坐ける又其二口の中より一を平野一を忌火
祭ミを給ふハ唯内膳司忌火庭火神と申させ給ひ
て別ハ平野をハ沙汰せざるなり然るハ其本社
平野神社ハ祀いわさせ給へる故ハ有べく又二共
ハ忌火神ハ渡ミせ給へる中ハ一ハ件の祭御祭ハ齋
祀ミるとのミなり一ハ忌火御飯ハ仕奉る料なるの
ミ有て其差別無が爲なる可ー又右ハ引る増鏡ハも
平野と云けるを陰陽寮ハ居て祭の祭と云事ハ用い
けれど中頃より彼祭ハ絶ぬとも有て後ハ司より

紀略ハ村上天皇ノ宣
和元年十一月廿日庚
辰節會せさせ
先置三瓜内膳司
御竈神三所自往
院渡せ奉渡の中納
言兼明卿供奉と
有ハ去年皇宮焼
上ハ依て冷泉院を
以て皇居ハ爲さ
せ給へる間ハ彼院
ハ内膳ハ置給へる
を此ハ皇宮已ハ成
て置幸の御時なる
ハ

今ハ圓融院御時爲
又所盜取ハ云ハ紀略
ハ永觀元年十月一日
癸未卯剋平野庭火
御竈公全被盜取了
十二月廿九日己午内
膳司平野御竈公
如元置本司件金先
日被盜取畢仍新
所鑄也と有ハ是也
此ハ天皇を兄部卿奉
る者なりの爲ー
所爲ハ

渡ー奉めて陰陽寮の物と
さへ成給へるぞ浅ましき又其一を齋(忌火)又と申奉るハ
紀略ハ謂ゆる平野祭二口と有る其一ハ内膳
るハ如ー是即中右記ハ十一月新嘗六月十二月神今
食祭奉仕之神也と有ハ如ミ其時の忌火御飯を仕奉
る料(料)あるハて此平野忌火ハ共ハ齋火武主比神の御
ハて平野神社の古開神ハ此御神ハ渡ミせ給ふ
可き次ハ其一を庭火と申奉るハ同記ハ是尋常御飯
奉仕之神也と所見たる即日ニハ所聞食す朝夕御食
夕火御食の御料ハ可ー所以ハ他所行幸の御時ハ
ハ必具ー奉ミせ給ふ御事ハ建暦御記竈神條ハ行

幸伀所之時中納言以下供奉と有る階梯ふ四宮記臨時
六一内膳御竈神奉遷伀所事以生絹覆之衛士八人舁之宮主殿解除納言一人
雜外記史以下歩供奉西復料初八支宮めと所見て如此
省荷料衛士十六人左右衛門府各八人
く供奉の式甚嚴重ある御事ふて今仕奉給ふのミるる
らず後宮東宮の行啓ゝ然るべけゝし紀略ふ圓融天
皇天元五年六月廿日庚辰今日中宮御竈神自太政大
臣四條第奉渡内膳司と見え清少納言枕草紙ふ后の
晝の行啓御産屋官始の騎ゞ犬く狛大障子ふど持參
りて御帳の上ふ補理くしつ居えて内膳御閑都比渡し奉めて
ふど爲たると見ゆ臨時祭式行幸時祭若不經宿不祭條ふ御

井ふ御竈神祭云ゝ中宮御竈祭皇宮准此云ゝと有る是ふ
り此等の行幸行啓ハ重き御神事と申すふも非ゝ
尋常の御飯を聞食す御事ふ御在し坐せば唯庭火の
ゝと供奉せしめらる可きふ平野忌火をも合せ奉り
て携へさせ給へるあり柳我皇大御國ゝしも天照國
の日宮より齋庭の瑞穗を受賜ひ傳へさせ御在し
坐て万千秋の長五百秋の瑞穗國ふし有けゝば君上
の御上ふ於てハ平素と雖も其御慎しゝ深く御在し
坐て朝夕の大御食せと申せども然る忌火を以て忌炊
ゝせて聞食すが故ふ其内膳司の御竈をも天津神寶

ふ亞て齋〳〵せ給ふるむ實ふ尊〳〵とも高〳〵ゝゝ云ゝ
得難ふ愛たく美〳〵き大御手振ゐめける猶下二百十丁
阿須波神波比岐神の傳ふ云る事共を考合せて大ふ
曉る所有るゐり〳〵又紀略天德四年十一月廿日丙辰
内膳御竈神鳴召陰陽寮有御占又應和二年正月五日
甲子内膳司御竈鳴と有り臨時祭式ふ鎮竈鳴祭云て
と云事の有て謝奉〳〵〳〵るゐど甚可異き物ふ爲たり
〳〵ゐり其ハ天智天皇十年御紀ふ大炊寮有ハ鼎鳴或
一鼎鳴或二或三俱鳴或ハ俱鳴と有て天皇崩御〳〵給
ひ壬申の乱と成る徵ゐめ〳〵惡例ゐる故ふ必其時毎
ふ鎮謝せ〳〵る
とふゞ有ける　此庭津日神ハ庭火皇神とゝゝ申奉めて
内膳司の御在〳〵坐て大炊寮ゐる竈神と同神ふ渡ら
せ給ひて上ふ此者諸人以拜竈神者也と有ハ此神ふ
も係て申す可き御事ゐると大炊寮と内膳司とふ鼎

と鐺とを神体と〳〵て祭別〳〵ふたる上ふ一ハ竈神ゝゝと
申〳〵を庭火神と異こふ称分させ給へるゐ故ふ終
ふ別神の如く傳ハゐこゞゝ右ふ引る書共ふ見えた
る狀ふ此司ふてゝゝ或ハ御竈神と申〳〵又ハ御門都比
とゝゝ申〳〵て別神とハ見えざるゐ上ふ大嘗祭儀を閲
るふ悠紀主基の齋郡ふ於て齋院を構〳〵ふて八神殿
奉〳〵ふ左京齋場ゐてゝゝ祀〳〵ゐ御膳八神と申〳〵て
と造〳〵ふ此ふ祭る神ハ御歲神高御魂神庭高津日神
大御食神大宮賣神車代主神阿須波神波比岐神ふ渡
〳〵せ給ひて何ゐゝゝ大嘗の爲ふ祭〳〵〳〵め給へる神等
ゐれゞ其等一ふ此庭竈神とハ祭〳〵る可きふ唯庭高

内閣文庫
内閣文庫蔵書印

高津日神のミ御在ー坐す即其神ハ竈神ホ坐故ゆ
ゆる又此文ホ徴ーて次ゆる庭高津日神ル此神の異
名ホーて共ホ上ホ謂ゆる竈神ホて渡ゝセ給へる御
事を明らめ奉り知べくるむ有ける備神名式ホ和泉
國大鳥郡大鳥美波比神社本國神名帳ホ正一位大鳥ホ波比
神社ヒ有り和泉志ホ社家説天照太神余按流記爲ホ
波比社ホ與美同韻相通延喜廿年四月五日職事祢宜
神主等所注進帳云正一位ホ波比社大鳥社内坐中宮
是也神田三段勅施入葦田正里卅五坪一段布施屋卅
六坪水合里一坪郡里六坪並三箇坪内二段畠地二百

国立公文書館
National Archives of Japan